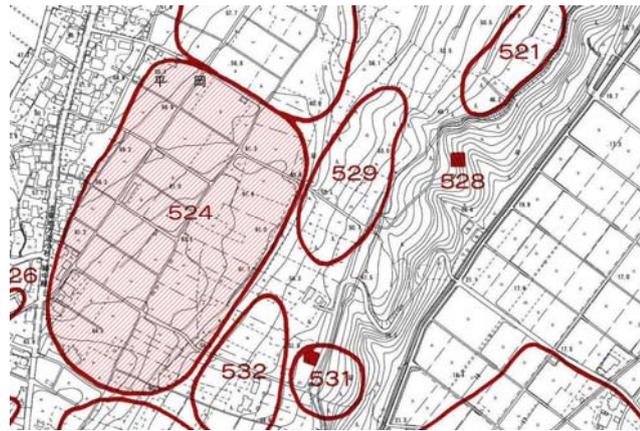


富山地域の縄文遺跡(4) 平岡遺跡

ひらおか 平岡遺跡の概要

平岡遺跡は富山市南西部に位置し、呉羽丘陵の南側から続く標高 60m 前後の河岸段丘に立地します。旧石器時代から人びとの活動の場となり、縄文・奈良・平安時代に集落が営まれました。縄文時代草創期（約 12,000 年前頃）の槍先形尖頭器なども採集されていますが、縄文時代の集落が営まれた中心的な年代は前期後葉（約 5,500 年前頃）と考えられます。



平岡遺跡 (524) と周辺の遺跡

この遺跡は、森秀雄氏の著作『大昔の富山県』（昭和 26 年、清明堂書店）で広く紹介され、縄文時代の遺物を採集できる遺跡として知られてきました。平成 21 年には道路新設計画に先立って試掘調査を行い、下層に縄文時代前期の遺構、上層に奈良・平安時代の遺構が確認されました。

その後、平成 24 年の発掘調査で、70 基の墓を囲むように竪穴住居跡が 14 棟確認され、縄文時代前期後半の環状集落だったことが明らかにされました。集落中央部の墓域は直径 65m と推定されます。

平岡遺跡採集石器(栗山・青江・亀田コレクション)

平岡遺跡では、多くの考古学研究者によって石器や縄文土器片などが採集されてきました。市に寄贈された考古学研究者のコレクションから縄文人の生業に迫ることができます。

栗山コレクション（富山市考古資料館） 栗山邦二氏が採集されたコレクションには石鏃（矢じり）・石錐（穿孔具）・石匙（ナイフ）などがあります。

青江・亀田コレクション（富山市埋蔵文化財センター） 青江清行氏・亀田正夫氏が採集されたコレクションには、特筆すべきことに 1,200 点を超える多数の石鏃があります。

石器からみた平岡遺跡の縄文人

石材 平岡遺跡の石器は、黒曜石・安山岩・鉄石英・頁岩などさまざまな石材で作られています。遠隔地からもたらされた石材で最も多いのは、富山から約 100km 離れた岐阜県（飛騨南部）の湯ヶ峰に産出する下呂石です。

石製装身具 玦状耳飾（玦飾）が 40 点以上採集されていることは注目されます。玦状耳飾は縄文前期に盛んに作られた「耳飾り」で、まれに特定の墓から 2 個一対で検出されます。平岡遺跡では玦状耳飾の未成品が数点出土していますが、製作時に生じた石屑は採集されておらず、遺跡内で玦状耳飾を製作していたかどうかは、現段階では不明です。

石鏃 県内でも格段に多い数の石鏃があり、多様な石材が用いられました。形態や大きさの違いは、年代や狩猟動物の違いのためです。先端が欠けているものは、狩猟に用いて破損したものと考えられます。

縄文時代前期は、現在より年平均気温がおおよそ 2℃高い温暖な気候だったと考えられています。呉羽丘陵や射水丘陵といった起伏のある自然豊かな低丘陵は、シカやイノシシなどの最適な生息地であったようで、これらを狩猟するために多数の石鏃が使用され、遺跡内に残されたと考えられます。

低い丘陵に立地する縄文時代中期の史跡北代遺跡（北代縄文広場）・史跡串田新遺跡（射水市）、後期の二本榎遺跡（平岡遺跡の南隣）でも 400 点以上の石鏃が確認されています。藤田富士夫氏は、これらの遺跡で確認されている石鏃の数に注目しました（藤田 1996）。長期間にわたる狩猟活動によって平岡遺跡周辺の動物数が減少したため、新たな狩猟域が北代・串田新周辺へと移りました。それに伴い、拠点集落もその地で営まれました。縄文時代後期になると自然環境の悪化（気候の冷涼・湿潤化）も相まって、両遺跡周辺の動物数が減少しました。このような変化を受け、動物数が増加傾向にあった二本榎周辺が狩猟域になったと考えられています。

石皿と凹石 石皿と凹石はクルミやドングリなど、木の実を割って製粉するための道具です。里山の豊かな植物の恵みも享受していたことがわかります。

平岡遺跡と史跡北代遺跡

両遺跡は、縄文時代前期と中期における地域の拠点集落でした。豊かな自然（動植物）環境が縄文人に重視され、定住の場として選ばれたのです。両遺跡には、環状集落であること、多数の石鏃が確認されていることなどの共通点があります。呉羽丘陵周辺における拠点集落の位置や年代から、地域の動物数などに応じて集落の位置を移しながら自然と共生した縄文人の姿が垣間見えます。

主要参考文献 藤田富士夫 1996「縄文時代の生業活動」『婦中町史 通史編』婦中町

編集・発行 富山市教育委員会埋蔵文化財センター